

歐洲出張ヨリ本月二十日歸朝ノ旨届出タリ
書記 北浦 大介

同 二十七日

書記 筒崎 謙齋

物品會計官吏代理ヲ免ズ

同 三十日

學校長 正木 直彦

敘從三位

元教授 結城 林藏

敘正五位 特旨ヲ以テ位一級被進(宮内省)

同 三十一日

五十嵐忠六

東京美術學校雇ヲ命ズ 監視ヲ命ズ

巡視 渡部千次郎

東京美術學校雇ヲ命ズ 監視補助ヲ命ズ

○職員動靜

○正木〔直彦〕校長 電話番号九五三は牛込九五三番に變更。

○大村〔西崖〕教授 同じく牛込二五四三番に變更。

○島田〔佳矣〕教授 今般電話高輪四五七〇番架設。

○渡邊〔啓三〕教授 今般電話小石川六八三六番架設。

関連事項

① 田辺至の在外研究

大正十一年二月四日、西洋画科助教田辺至は文部省より滿二年

間のフランス、イタリア、イギリスにおける在外研究を命ぜられた。彼は明治十九年十二月二十一日東京市神田区猿樂町三丁目に生まれ、明治四十三年本校西洋画科を卒業。同四十四年本校雇となり、大正四年五月図画師範科西洋画授業担任、同八年四月助教(担任は同前)、同九年四月図案科第一、第二部西洋画授業兼任(同十年一月図画教員志望者の西洋画授業兼任に変更)となった。

留学に出発したのは大正十一年三月十一日で、追って同年十月ドイツ、スペインが在留国に加えられた。『東京美術学校校友会月報』第二十一巻第四号に掲載されている彼の書簡の中には、

私の今居ります宿が、昔山本芳翠氏や合田〔清〕先生の寄寓せられた家だそうで、黒田〔清輝〕先生や久米〔桂一郎〕先生を宿の主婦が知つて居ります。

とあり、編者はその住所を 4 Rue de la Suintinie Versaille Set O France と紹介してゐる。

田辺の「美術遍路余談」(大正十三年十一月十一〜十五日『報知新聞』連載。同年九月十五日執筆)はフランス、ドイツ、オランダ、イタリア、スペインにおける美術見学の印象を記したものであるが、特に版画に関して多く記述している。それによると彼は「パリに來て、大部分の畫家が、版畫に興味を持ち、容易くこれを取扱つてゐた事實にふれて、浮世繪を通じて版畫の國とまでいはれてゐる現在の我々に、この方面の作品の乏しいことを感じ」させられて、帰国後はさらに版画に力を注ぐべく、意欲的に西歐の版画を研究した模様で

ある。

帰国は大正十三年六月二十三日で、直ちに復職し、その後昭和三年六月に教授に昇格。同七年四月に図画師範科から西洋画科へ転じて同十九年六月まで在職する。

② 中村勝治郎の死去

中村勝治郎（第一巻331頁参照）は黒田清輝の推輓により明治三十年五月本校雇となり、同三十八年十二月助教に昇格、西洋画科授業および塑造部木炭画指導を担当した。画家としては白馬会によく出品した外は、第四回内国勸業博覧会、関西美術会第一回展、セントルイス万国博覧会、第二、三、七回文展、美術新報主催第三回展、国民美術協会第一回西部展などに自然の写生を旨とする温和な作品を発表したが、活動は極めて地味であったと言える。

中村は大正八年十二月七日に脳卒中に陥った（同九年四月作成「俸給半減同」には同九年一月八日以後欠勤とある）。親友の黒田清輝はその八日後にこれを聞き、直ちにお抱え医師を連れて訪れたが、日記に「殊ニ氣ノ毒ナルハ精神状態ナリ」と記しているように、中村の病状は悲惨であった。そのため黒田は同九年一月に麻布笄町の別邸内にあった小さな家に家族もろとも中村を移り住ませ、療養にあたらせるとともに、自分も夫人を連れて時折り見舞った。中村は具合の良い時には家人に伴われて宏大な庭園を散歩したり、庭の片隅にあったバーナード・リーチの窯場や画商仲夫妻などを訪れたりした。しかし、全快の見込みは薄かったので、黒田は正木直彦と相談して優遇退職の措置をとり、その結果、中村は同十年

一月に休職を命ぜられた（翌十一年一月満期退官）。その後、中村の死を予期した家族は北豊島郡高田町大字旭出五十五番地に家を購って引移り、ここで中村は同十一年二月四日に死去した。葬儀は二月八日に芝の青松寺で挙行された。

中村の死後、中村と黒田の共通の友人である弁護士町井鉄之助は遺族のために裁判所内で中村の遺作展を開き、五、六十点を展示したという。黒田の日記に「夕刻一時間許中村君ノ未成肖像畫ニ補筆ス」（大正九年八月十四日）、「中村君ノ菊花圖ノ破損ヲ繕ス」（同十年二月八日）などとあるのは、この展覧会のためであったのかも知れない。黒田も中村より二年余り後に笄町の邸内で死去する。

③ 黒田清輝の帝国美術院長就任

大正十一年七月九日、帝国美術院長の森鷗外が死去したため、同月二十一日に黒田清輝が新院長に就任した。帝室技芸員、子爵の肩書を有する黒田は本校西洋画科教授の本務の傍ら宮内省御用掛をつとめ、また、官展や博覧会の審査委員を歴任しただけでなく種々の役職に就き、大正九年三月貴族院議員当選、同十年一月社会事業調査会委員に任命、同年七月臨時教育行政調査会委員に任命、同十一年十月教育評議会委員任命、同十二年十二月対支文化事業調査会委員に任命等々が示すように、煩雑な職務に追われ、作家生活が損われた。その状態のまま同十三年七月には死去する。種々の事情があったに違いないが、晩年を後世に残る一枚の絵にではなく俗事に費したことは惜しむべきことである。因みに『東京朝日新聞』（大正十一年六月六日）は懐中時計を見る忙し気な紳士黒田の写真とともに